寄書

オトツサン　　川合生

兼て評判のKT（富田委員長の事）君は、豫想の如く適任の好委員長であつた。二階から飯の催促など、隨分思ひ切つて活潑の事を演ぜられたが、吾々は常に喝采し賛成して「流石は委員長」だと褒めて居た。

殊に第二回目の茶話會の如きは、ステキな手腕を揮はれた、午後八時から九時三十分迄僅に一時間半の短時間であつたが、非常の盛會で、會員は悉く醉つた樣になつた、行人足を止め、宿の下婢に至る迄、悉く謹聽して居たのも無理はない。翌朝は疲勞して、早朝起き出づるの勇氣がなかつた。會員は今更の如く、皆KT君の伎倆に敬服して居つた。

又仝君は、親切で溫顏で、一見舊の如く、話される事が趣味津々として、實に慕はしい人だ。之れからも講習會でもあつたら、先づ第一番に呼び出して下さい、兎に角、會員を慰安された効は盡し難い、會員一同から深謝する次第である。

併し、委員室とは距つて居て、起臥飲食を共にする事が出來なかつたのは、遺憾の極である。

下婢はお幸お千代の二人が、親切でよかつたが、便所の手洗水の乏しかつたには閉口した。

高野日記の一節　　T、S生

八月十六日。溫度午前六時六十四度、午后一時七十八度、午后九時七十度。

八時頃から奥の院へ友人と　一人づつて、武田信玄の廟を中景に、古杉の大木を近景に、墓石と雜草と杉とを遠景にして寫す。珠に廟の綠の杉葉、皆深い色である。四國順禮が前の道を通つて行く、樵夫が五六人重さうな荷を負ふて杉の森から出て來た、荷負ひの姿が隱れると、順禮の鈴の音が杉木立に響いた、じわ〳〵とした水氣が膚へを襲う、雨に遇うた三上參りの道者が通る、小雨が降つて來た。

十八日。溫度午前六時六十一度、午后一時半八十六度、午后八時七十二度。

金剛峯寺の前を西に出て、金堂の南側で町を寫す、と、曲藝師の一座が目の前で口上を述べる、其親父の手拭に日光を受けて居るのと、股引との對照が實に面白い、やがて三人の小供が、荷の上で曲藝を始め出した、太鼓の音に人の山を築いた、自分は繪も畫けぬので見て居る、紀劦なまりで歌ふ劍舞の歌何だか田舍の村にでも有りさうな。

宿坊に歸つて風呂に飛び込むだ。

■『みづゑ』五十及び五十三號賣切